

青年大平正芳と佐藤定吉の「キリスト教」

住家 正芳ⁱ

クリスチャンであった大平正芳元首相がキリスト教に惹かれるきっかけとなったのは、18歳の時に高松高等商業学校で聞いた佐藤定吉^{ていきち}の講演であり、大平は佐藤の主催する「イエスの僕会」^{しもべ}に参加して活動していた。この点については生前、大平自身が語っており、大平に関する研究や著作物でもしばしば触れられている。しかし、大平が佐藤のどのような講演を聞いたのか、佐藤は高松でどのような伝道活動を行ったのかなどを詳らかにしたものは見当たらない。そこで本論文は、佐藤が設立した産業宗教協会の出版物や佐藤の著書などを参照することで、佐藤の足取りをたどり、大平が佐藤のどのような講演を聞き、参加した集会はどのようなものだったのかを探った。明らかになったのは、佐藤がきわめて精力的に全国を伝道してまわっており、大平が感化された年だけでも2度、高松を訪れていたことであり、佐藤の説く「キリスト教」が独自の観点から科学と宗教を結びつけ、キリスト教を天皇崇拜と接合しようとする傾向が当初から色濃かったことである。

キーワード：大平正芳，佐藤定吉，イエスの僕会，日本的キリスト教

はじめに

1978（昭和53）年12月7日から1980（昭和55）年6月12日に亡くなるまでの間、内閣総理大臣を務めた大平正芳がキリスト教の信仰を持っていたことは生前よく知られていた。首相に就任する直前のインタビューで大平は、「若いときに入信して、洗礼を受けたが、このごろは聖書や教会から遠ざかってしまっていて……。熱心なクリスチャンとはいえないけれど、そういう傾向はもっている、といえますね」（[1978]2010b: 571）と語っている。

大平がキリスト教に惹かれるきっかけとなったのは、高松高等商業学校への進学後に接した佐藤定吉^{ていきち}の講演であった。感化された大平は佐藤の主催する「イエスの僕会」^{しもべ}に参加して軽井沢や東京にまで出

かけて活動することになる。この点については、自伝にあたる『私の履歴書』で大平自身が語っており、公式な伝記ともいべき『大平正芳回想録』にも記録されている。

しかし、大平が佐藤のどのような講演を聞いたのか、佐藤は高松でどのような伝道活動を行ったのかなどについては、両書ともにあまり踏み込んでおらず、佐藤が設立した産業宗教協会が発行していた雑誌『科学と宗教』の記録ともずれがある。

そこで、本論文は、産業宗教協会の出版物や佐藤の著書などを参照することで、佐藤の足取りをたどり、大平が佐藤のどのような講演を聞き、参加した集会はどのようなものだったのか、すなわち若き日の大平が触れた「キリスト教」がどのようなものであったのかを探ることとしたい。

i 立命館大学産業社会学部教授

1. 大平正芳とキリスト教

1910 (明治43)年3月12日に香川県三豊郡和田村 (現・観音寺市) の農家の三男として生まれた大平正芳は、「富裕ではなかったが、とくに困窮することもなく、これという秀才でもないが、手がつけれない悪童でもなく、無事平凡に幼少期を送ることができた」(大平 [1978]2010a: 16)。しかし、中学4年に進級した夏、ひどい腸チフスにかかって4ヶ月ものあいだ生死の境をさまよう。一命はとりとめたものの、献身的に看護してくれた父を翌年の夏、1927 (昭和2)年に亡くす。この間、学費のかからない海軍兵学校の試験を受けるが、中耳炎のため体格不適格となっている (大平 [1978]2010a: 17-18)。そのため、学費の負担を避けて上級の学校へ進むには師範学校の二部しか選択肢がなかった。この頃は 大平にとって辛い時期であり、友人と校庭を歩きながら空を仰ぎ、「We must be vivacious!」と叫ぶこともあったという (大平正芳回想録刊行会 1983: 28)。

ところが、母の妹にあたる叔母が高松市近郊の自宅から通学させてくれることとなり、1928 (昭和3)年4月、高松高等商業学校へ入学することができた (大平 [1978]2010a: 18)。そこで佐藤定吉の講演を聞くことになる。

私が高商に入学して間もなく、工学博士佐藤定吉先生が来校し、講演を行われた。演題はたしか「科学と宗教」であったかと思う。佐藤博士は東北大学の教授をやめられてから、「イエスの僕会」という学生団体を全国的に結成して、科学を通してみたキリスト教の伝道に専念されていた。キリスト教は、私にとって全く無縁の世界であった。ところが、どうしたものか佐藤先生のお話に感動し、その夏は浅間山麓の研修会に参加したり、秋には青山の青年会館における全国大会にも出席するほど夢中になってしまった。そればかりか、同志とともに、しばしば東京

や高松の街頭に立って、信仰の告白をすることも辞さないようになっていた。(大平 [1978]2010a: 19)

この佐藤の講演について、『大平正芳回想録』は1928 (昭和3)年4月のこととしている (大平正芳回想録刊行会 1983: 30)。だが、『科学と宗教』誌の記録では、佐藤が高松にやって来るのは6月であり、4月はまだこの年前半の地方伝道活動が始まったばかりであった。佐藤は4月23日の甲府を皮切りに、松本、新潟、金沢を4月中にまわり、5月の間に京都、大阪、奈良、神戸、長崎、熊本、鹿児島、佐賀、福岡、門司、下関、別府、秋吉、山口、広島と、きわめて精力的な伝道行脚を続け、6月に入って松山、新居浜を経て4日に高松で講演を行っている。そして翌日5日にはもう岡山へ移り、その後は姫路、高知、大阪、鳥取とまわって、鳥取からは大阪、名古屋を経て6月17日に東京へ戻っている (『科学と宗教』20: 26-34)¹⁾。

6月4日の高松では、1日のうちに明善女学校、高松高商、一般市民向けの高松公会堂の3か所で講演を行っており、聴衆の数はそれぞれ明善女学校700名、高松高商600名、公会堂400名とされ、これら3か所での「決心者」は80名とされている (『科学と宗教』20: 32)。「決心者」というのは信仰を決意したことをその場で表明する者のことだが、必ずしも信者として定着するわけではない。

この日、佐藤は午前8時に新居浜を発ち、11時半に高松に着くとすぐに明善女学校へおもむき、午後1時から2時半まで同校の生徒たちに「新日本を負ふて行くべき今後の婦人の使命に就いて論ず如く、宥める如く」(『科学と宗教』20: 118)語り、信仰生活が大切である理由を教えて神への道を諄々と説いた。『科学と宗教』誌の記録によると、「何者かを常に求めて止まぬ人々の心の中に、神の愛の光を燈し得た印象深い集まりであった」(『科学と宗教』20: 118)という。

この後すぐ3時から高松高商の講堂での講演であり、大平が佐藤の講演を初めて聞いたのはこの時

であったと考えられる。連日の移動と講演でさすがに佐藤の声はだいぶかかれていたが、それでも「新日本の使命と青年の覚悟」の演題で2時間に及び熱弁をふるった。内容は「現代日本の世相より説き起して、科学より宗教への道を述べ、神と偕なる信仰生活こそ人間至高の価値生活であると力説」(『科学と宗教』20: 119) するものであった。

演題は大平の記憶とは違っているが、内容は「科学より宗教への道」に関するものであったとされており、このことから大平は演題を「科学と宗教」として記憶したのであろう。あるいは、佐藤の講演の中で大平にとって印象深かったのが「科学と宗教」に関する部分だったのかもしれない。高松高商での講演会は「感激裡に五時半閉会」したという(『科学と宗教』20: 119)。

さらにこの後、夜7時半から高松公会堂で一般向けの講演が行われている。大平が高松高商での講演に感銘を受けたのであれば、続けてこの講演にも足を運んだ可能性はあると思われる。昼の講演で声がかれていたように、連日の講演旅行で佐藤の体は疲れ切っていたはずだが、高松公会堂での講演は力のこもった「警世の大獅子吼」であったという。内容は、日本は今や滅亡の断崖に盲進しつつあり、一大危機に遭遇しているのであって、我々は自らの中に潜む恐ろしい敵と戦い、勝利すべきである。そのためにはまず「信仰の力を得よ。同胞の一人一人が愛と信仰の両靴を履いて歩む時、始めて日本は救れる」(『科学と宗教』20: 119) というものであり、高松高商での講演に比べて、よりアジテーション的な色合いの強いものであったことが伺える。「先生の熱弁は、感極つて打鳴らす聴衆の拍手に送られて、遂に体験の宗教に入り来り」、「最後には満堂悉く祈りの気分浄化され」たという(『科学と宗教』20: 119)。

もちろん、これは佐藤の支持者による記録であるため、割り引いて読むべきものであろう。この後、同年11月に再び高松を訪れた際の記録には、6月に高松を訪れた際はまだ「何となく時期尚早の感もあ

つた」(『科学と宗教』25: 54) と書かれている。

ただ、佐藤にある種のカリスマ性があったことは確かなようである。佐藤は「すぐれた霊覚と、科学者の天分と、独得な弁舌と、人間的魅力とに加えて、燃えるような信念の持ち主であり、とりわけ学生や青年の心を強くとらえて放さず、いやおうなしに信仰に引き込んでしまう」(服部 1970: 534) のであり、その話に接した者は「磁石に吸われる鉄片のように急速に熱を帯びて先生の話に聞き入り、そのままざしをじっと見つめていた」(水野 1970: 452) という。

大平もまた、佐藤の講演に引き込まれ、この年の7月末に浅間山麓の軽井沢での研修会に参加する。そして、11月23日に再び高松高商で行われた講演会では、「先生の講演前大平氏の熱情溢るゝ開会の挨拶」(『科学と宗教』25: 57) が行われるまでになる。

2. 佐藤定吉と「イエスの僕会」

では、18歳の大平正芳をこうまで感化した佐藤定吉とはいかなる人物であろうか。佐藤定吉の生涯については、『佐藤定吉追想録』に息子である佐藤信がまとめた伝記がある(佐藤 1970)。それによると、佐藤定吉は1887(明治20)年11月20日、徳島県那賀郡富岡町(現・阿南市)に生まれた。父親はもと農家の生まれであったが、出家して妙泉寺という日蓮宗寺院の住職となった人物であった。郷里の人々から「変わった人」とも評判された佐藤であったが、学校の成績は優秀で1905(明治38)年、三高へ進む。佐藤の小学校時代に日清戦争が、中学校時代に日露戦争があった影響から、当初は海軍を志したようだが、健康に自信がなかったために「軍艦を働かせるに一番大切な火薬の研究により日本国家に尽したいとの念願」(佐藤 1970: 547) から三高の理科を選んだという。

キリスト教にはじめて触れたのがこの頃であり、海老名弾正の講演会には非常に感激し、海老名の武士道的な人格にすっかり魅せられたと常々語っていたという(佐藤 1970: 548)。この三高のYMCAで

は後に日本社会党を率い、内閣総理大臣にもなる片山哲と知り合っている。

1908(明治41)年、東京帝国大学工科大学応用化学科へ入学。在学中は帝大YMCAの寮から通う。在学中にチフスにかかり重態となって生死の境をさまよいが回復。その時、もうろうとした意識の中でキリストの姿を見たことがきっかけとなって(佐藤 1924: 81-3, 佐藤 1970: 548), 1910(明治43)年、本郷弓町教会において海老名弾正から洗礼を受ける。

1912(明治45)年7月10日、東京帝国大学を卒業。明治天皇から恩賜の銀時計を拝受する。明治天皇が崩御するのは20日後のことであり、病軀をおしての臨席となった。佐藤はこの時の感激を終生忘れなかったようであり、後に佐藤の思想や信仰が国家主義に傾いたのはこの時の感激に大きく影響されたのではないかと、佐藤信は記している(佐藤 1970: 549)。

卒業後すぐに九州帝国大学に赴任し、一時東京帝大の講師も兼ねた後、1914(大正3)年に東北帝国大学教授となる(佐藤定吉年譜: 4)。佐藤は組合教会に属し、仙台でも教会員として活動していた。その後、アメリカ留学を経験し、1921(大正10)年には論文「大豆蛋白の工業的応用」で博士の学位を得るなど、学者として順調な経歴を重ねてゆく。この間、1919(大正8)年に住まいを東京目白の下落合に移して「佐藤工業化学研究所」を設立。向島に工場を設けて大豆たんぱく質の合成樹脂を発明し、「サトウライト」と名付ける。後のプラスチックの先駆けである(佐藤 1970: 550-2)。東北帝国大学での職務については1918(大正7)年に休職となる一方で講師を嘱託されるなど、一定の関係を保ちつつも実質的に退職したようである(佐藤定吉年譜: 4, 猪口 1970: 336)。

そして、これと反比例するように宗教活動への傾斜は強まってゆく。1919(大正8)年から神田の救世軍本営で講義をするようになり(佐藤 1924: 1), 救世軍の山室軍平とは家族ぐるみのつき合いとなる(山室 1970: 365-7)。救世軍での講義は、はじめは聖書についてのものであり、次いで「自然科学と宗

教」と題する講義を行うようになった。毎回2, 3百を超える数の聴講者があったといい(山室 1970: 369), この講演内容が後に『自然科学と宗教』として出版される。

同書において佐藤は、自然科学と宗教の違いは、神を客観的立場から観察するか、主観的立場から観察するかの違いに過ぎず(佐藤 1924: 80), 自然科学は神に至る一つの門であり、信仰は自然科学を生み出すべき母であるとする。したがって、自然科学をもう一步深く徹底的に進ませるためには信仰生活に入らねばならない、というかたちで科学と宗教を接合する(佐藤 1924: 116)。佐藤は、信仰の生活や霊界の消息を体験することによってこそ、地上の事象を徹底的に洞察することができるのであり、さらにその逆に、自然現象の研究によって霊界の消息に通じ、その門のうちに入ることも可能となるのだという(佐藤 1924: 117)。そして、聖書から「奇跡」という言葉を取り去ることが信仰を持つ科学者に課せられた重大な責任であるとする。佐藤にとっては、生命に関する科学的研究が完成される日こそ、聖書が科学的に立証される日なのである(佐藤 1924: 189)。

佐藤は『自然科学と宗教』が「行き詰れる現代の日本」(佐藤 1924: 2)を救う一助となることを願い、「一日の吾人の誤てる歩みは日本一国を暗黒に導く事になる」(佐藤 1924: 272)と自負するなど、科学と宗教について語りつつも、日本の危機とその救済を強く意識している。そして、「今は惰眠より醒むべき時である、復活の秋である。如何に醒む可き乎? そは信仰! 信仰に覚醒すべき秋である!」(佐藤 1924: 272)と訴え、「誰れか正義のために人道のために、国民の罪の贖のために、己れを十字架に捧げるものはないか。此の勇士こそは日本を滅亡と暗黒より救ひ出す光であらねばならぬ」(佐藤 1924: 197)と呼びかける。

この呼びかけが全国の若者への伝道活動へとつながってゆくが、そこまで踏み込む宗教上の大きな転機となったのが、1924(大正13)年8月に5女慈子

が2歳半で夭逝したことであり、その経緯は『死に直面せる体験』に記されている。

愛児の冷たい死骸を眼前に据へて、それを通して霊界の光景を凝視せしめられた私には、最早や理屈を超へて、神の前にひれ伏し、十字架上の基督を「お、主よ!」と叫び奉る他に何者もなかつた。私の残る生涯の方針の一切は、これにて決せられた。私の求めに求めた「祈り」はこれにて聴き届けられ、神はこの愚かな小僕の熱禱に応へ給ふに愛児の死を以てせられた。(佐藤 1925: 5)

この体験から佐藤は、「私の残る生涯の使命は死後の靈魂の状態を科学的に闡明する事である」(佐藤 1925: 55)と決意するに至る。そして、1926(大正15・昭和元)年の初め頃から全国の高等学校や大学の学生たちに対する伝道を始め、その第一陣が埼玉の浦和高等学校の学生たちによって始められた。「十字架のついた提灯をもった学生たちが路傍に立って大声で賛美歌を唱い、証しをし、祈禱をして路行く人々に神の救いの福音を語りかけた」(佐藤 1970: 553)。こうした野外伝道活動は救世軍の用語から「野戦」と呼ばれる。この年の末には月刊誌『科学と宗教』を創刊し、翌1928(昭和3)年4月にも月刊誌『暁鐘』を創刊する。『科学と宗教』が大学生や高校生に向けたものであるのに対して、『暁鐘』はより一般に向けた読みやすいものとなっている。

そして、この間1927(昭和2)年4月27日、京都での集まりの後、佐藤は自らの運動を「イエスの僕会」と名付け(目加田 1970: 457)、8月には浅間山麓での第1回修養会を開催する。「イエスの僕会」の運動は全国的に広がり、翌年に発行された『科学と宗教』第14輯には、浦和、水戸、松山、京都、松本、広島、岡山、長崎、新潟、熊本、大阪、神戸、山口、名古屋、仙台、福島、山形、姫路、松江の「イエスの僕会」の活動報告が掲載されている(『科学と宗教』14: 70-76)。

大平正芳が佐藤の講演に初めて触れた1928(昭和

3)年は、「イエスの僕会」が始まったばかりの頃であり、活動が熱気にあふれていた時期であったといえる。大平はその熱気にほだされ、浅間山麓での研修会に参加したわけである。

3. 浅間山麓男子修養会

大平の言う「浅間山麓の研修会」とは、「浅間山麓男子修養会」というものであり、大平が参加した1928(昭和3)年は前年夏に続くその第2回目であった。軽井沢千ヶ滝の佐藤の別荘に、佐藤を中心として30名ほどが集まった。

まず、修養会に先んじて7月21日から23日まで各地の「イエスの僕会」の代表者を集めた幹事会があり、24日から修養会の参加者が集まって来た。後に、高松高商を卒業した大平が大阪に出て事業を手伝うことになる桃谷勘三郎が寄贈した大天幕が張られ、新調された30台のベッドが組み立てられ、歓迎門が作られたところに、各地からやって来た大学生や高校生が拍手で迎えらる。午前中、はじめての集まりが持たれると、連日の雨がおさまり、雲間から光が漏れる中、佐藤の祈禱に続いて参加者たちが祈りを捧げる。「一同の霊が明らかに父の御手に支へられてゐるのを覚へる。勝利の歌を高らかに歌へば浅間の雲が次第に晴れてゆく」(『科学と宗教』21: 56)。夕食の後は歓迎会を兼ねた親睦会で各自が自己紹介し、信仰の様子を語り合った。

明けて7月25日が修養会の第1日であり、朝5時半から早天祈禱会として佐藤が祈禱し、それに続いて参加者たちも祈る。その様子は「聖なる聖なる神は明かに御姿をあらはし、一人一人を潔め給ふ」と描写されている(『科学と宗教』21: 56)。8時半からは森で瞑想が行われる。席をまるく並べて「一同端坐して深き靈的交渉に入る」(『科学と宗教』21: 56)。

9時過ぎからが修養会であり、服部治が靈的進化論の立場から青年の使命に説き及んだ(『科学と宗教』21: 57)。服部治はこの時、東京帝国大学理学部動物学教室の専任講師であり(石黒 1970: 395)、後

に京都帝国大学助教授となるが、それを辞めて「イエスの僕会」の活動に身を投じ、佐藤の長女の婿ともなった人物である(西本 1970: 487)。続いて佐藤が「信仰生活の中心、即ち活ける神及び主の臨在について改めて一同の確信を強め」(『科学と宗教』21: 57)る。午後から夜にかけては親睦会となり、10時に佐藤の祈りで閉会となった。

修養会2日目、7月26日はよく晴れて浅間の姿が美しく見え、朗らかな朝となる。澄みわたる空気や囀る小鳥、小川のせせらぎの音が「霊の奥底にしみ渡る如く」(『科学と宗教』21: 57)であったという。この日も前日同様に早天祈禱会から始まり、「森の瞑想はいよいよ恵まれ、各々啓示を受けて言葉を以て伝へる。言々句々深刻にして莊嚴、熱あふれ力漲り、全く神御自身語り給ふとより外は考へられぬ」(『科学と宗教』21: 57)という。

修養会は服部治の「生命の棄て場処に就ての証し」に始まり、佐藤は「イエスの僕会」の信条第三項について、「活けるイエスの体験に発する宗教運動こそわれらの目標であり、単なる学としての宗教は何等の力を与ふるものでない」と解説し、「活ける主を中心とする生命の宗教運動」の必要性を訴えて参加者の「蹶起」を促す(『科学と宗教』21: 57)。「イエスの僕会」の信条第三項とは、「我等は分派的教義、宗旨を超越し、イエスの霊的体験を中心とする実生活を以て宗教の根本義となす」(『科学と宗教』18: 6)というものであり、佐藤が「実生活」という点を強調したことが伺える。

この日の午後も親睦会にあてられ、「一同悉く主の活きてわれらの間に立ち給ひ、われらの運動を導き給ふことを見て、何時しか祈り一同の口を衝いて出で来り」,「大りバイバルの光景凄じく、靈動天地を揺がすの概あり」(『科学と宗教』21: 57)という様子であったという。夕方からは沓掛駅(現・中軽井沢駅)前での「野戦」に向かい、「二列縦隊を作って足並勇しく軍歌を歌うて進みゆく」(『科学と宗教』21: 58)。

修養会3日目、7月27日も早天祈禱、瞑想で始ま

り、修養会では佐藤が「信条第四項に基づく僕会の大事業について」講義する(『科学と宗教』21: 58)。信条第四項とは、「我等は生命界の真理を広く宗教に求め、神道、儒教、仏教を旧約とする活けるイエスの新約運動を以て目的とし、従来の直訳的伝統を脱して東洋的基督教を樹立せんとす」(『科学と宗教』18: 6)というものである。

佐藤は明治以降の日本の知的状況を、西洋のものの直訳でしかないとしばしば批判しており、信条とならぶ「イエスの僕会」の基本方針ともいうべき「我らの主張」において、以下のような時代認識を示している。すなわち、自由主義、民衆主義を社会原理とすることを標榜した明治時代の文化は単なる模倣と翻訳であり、外形的な物質文化を直輸入しているだけの時代であった。まさに仏作って魂入れずであり、ここにこそ自由と平等を求めて、かえって真の自由を失うという明治時代の病弊が存在している。しかし、今や「昭和の聖代が来た」(『暁鐘』2: 6)²⁾。佐藤は以下のようにたたみかける。

明治維新が固陋なる島国的自己意識より世界意識への覚醒にありとすれば、昭和維新は算盤上の量的価値観念と理智の強殻とを突破しての生命意識の覚醒でなければならない。物質文化より生命文化への一大転移が昭和維新の鴻業でなければならない。……我祖国救済の爲め、我等は先づ日本自から明確なる民族的価値と、的確なる民族的理想と使命とを知らねばならない。……昭和の維新、それは霊的王国の建設にある。先づ何よりも人間建築である。宗教とは此の人間建築の鉄筋を意味する。(『暁鐘』2: 6-7)

「直訳的伝統」を脱するには、外形ではなく内面の覚醒が必要であり、それは物質文化から生命文化への転換による世界意識への覚醒であって、日本の民族的価値や使命の自覚なのであり、霊的王国の建設としての昭和維新である。そのためにはまず何よりも「人間建設」が必要であり、宗教こそがその人間建築の「鉄筋」なのだという。そしてその宗教に

ついて佐藤は、「神儒仏を旧約とする活けるイエスの新約運動」というかたちで諸宗教の集約統合としてキリスト教を位置づけ、「僕会運動の学的基礎と研究の根本」であるとす（『科学と宗教』21: 58）。

修養会での佐藤はさらに、日本の歴史や最新の海外事情を踏まえ、「現今の日本の霊的方面に涉りて詳細に論述して、如何にして全東洋を基督へ捧ぐべきかの根本的の方針樹立に関して懇切丁寧」（『科学と宗教』21: 58）に話をした。「全東洋を基督へ」は「イエスの僕会」のスローガンであり、信条第一〇でも、「我等は、国家的福祉と東洋民族救済の爲め、『全東洋を基督へ』の標識の下に神と人との前に完き献身を誓約するものとす」（『科学と宗教』18: 7）とされている。

修養会では、さらにキリスト教の歴史にも説き及んで日本の取るべき態度が明らかにされ、「何処までもイエスを中心として活ける御姿を目指して進まねばならぬこと」が力説された（『科学と宗教』21: 58）。午後にはまた親睦会があり、最後には佐藤に対する「一同の真の愛に就ての祈り止まず」（『科学と宗教』21: 58）といった盛り上がりとなる。

修養会4日目、7月28日の早天祈禱では佐藤の口から「汝聖められたり」という「啓示の言」が出る（『科学と宗教』21: 59）。そば降る小雨は「天来のバプテスマを施された」と受けとめられ、参加者たちの高揚感は以下のように表現される。

全身全霊光の衣を着、白雲に乗つて天涯を徐々と上昇するのであつた。森の遐想は今日はマキシマムに達する。十字架の血潮は一同の頭に注がれ、潔めの衣に着かへられ罪の絆は全く断ち切られてしまつた。主の心臓の血潮はそのまゝ、太き管を通してわれらの心臓に注がれ、渾身温き主の愛に包まれる。（『科学と宗教』21: 59）

修養会では佐藤が昨日に引き続き「イエスの僕会」の学的基礎を概説し、一同に対する将来の希望を明らかにした（『科学と宗教』21: 59）。

午後2時半からは沓掛駅前へ出て、「小供野戦」を開く。子供を対象とした街頭伝道であり、120人ほどの子供たちの前で「大の男の兄弟達」が「エス様神様沢山の目で」という歌を「可愛い身振りで踊り出す」という催しであった（『科学と宗教』21: 59）。大平も「可愛い身振りで踊ったのであろうか。その後、大人を対象とした「野戦」を行い、雨の降る中を「軍歌勇しく行軍して帰る」（『科学と宗教』21: 59）。

修養会5日目、7月29日は朝になって天候が回復し、佐藤の子供たちもまじえて浅間山腹の「押出」へ出かける。「押出」とは、一般に「鬼押し」と呼ばれるもので、1783（天明3）年の浅間山噴火によってできた溶岩流である。大平たちが登ったこの年は浅間山が噴火するおそれがあり、鳴動がしきりに起こる中、溶岩の荒野を進み、午後1時半に「押出」に到着。見渡す限りの岩が墨墨と削り立って高低をなす景観の中、全員で祈禱を捧げる。

祈りはいよいよ熱くして肺腑をついで出て来り、献身の祈りをする者相つぐ。聖霊今や一同を充し、各々の霊は溶け合ひ相結束して祖国の救ひのため、霊の王国建設のために死を覚悟した。……涙の祈りは引き続いて止まず、時に細雨降りそゞぎ天来のバプテスマを受くるに似たり。こゝに一同賛美と共に洗礼を施された。（『科学と宗教』21: 60）

帰路は雨に打たれ、軍歌を歌いながら帰り着いた頃にはすっかり日が暮れてしまっていた。

修養会6日目、7月30日は短い祈禱の後、遐想に入り、佐藤の口を通じて十字架の喜びと神の愛についての聖句が数多く示され、修養会では、神の愛は智の道を通じても現れるといった話があった。夕刻には軽井沢の教会で伝道集會が開かれ、佐藤が祈りを捧げた後、修養会の趣旨を説明して挨拶し、現今の社会の混乱を指摘した。そして「祖国の救ひと青年の使命」（『科学と宗教』21: 60）を「イエスの僕会」の若い会員たちが示すとして、会員たちが自ら

の深刻な体験をそのまま語って信仰生活の勧めを説くなどし、先に名前を挙げた桃谷勘三郎は霊的体験を如実に語って「主の今生きてゐること」を聴衆に信じさせたという（『科学と宗教』21: 61）。

参加者の体験記によると、「青年の使命」という点に関して佐藤が訴えたのは、現代の日本は有史以来の一大危機に瀕しており、この危機を救う者こそ「気力横溢熱血漲る昭和の青年」（『科学と宗教』23: 49）でなくてはならないということであり、「昭和の青年よ我等今何をなすべきか」と、「鋭く強く真剣に叫びかけ」た（『科学と宗教』23: 49）。感化された若者たちにとって佐藤は、一切の世相の推移を見通し、祖国のために立とうとする自分たちにその道を教えてくれる存在であったという（『科学と宗教』23: 49）。

修養会7日目、7月31日で修養会も最終日となる。佐藤は社会問題について語り、どこまでも神中心であることを訴え、宗教教育についても言及する。これは「イエスの僕会」の信条第六「我等は宗教的真理を以て、社会運動の創造的源泉なりと確信し、宗教の日常化及び職業の宗教化を期す」と、第七「我等は社会改造の根本義は人間建築としての教育にある事を信じ、全人的教育は宗教との帰一的境地に於いてのみ達成せらるべき事を主張す」（『科学と宗教』18: 7）に関連した解説と思われる。ついで、「十字架の奥義に関し、誠に確実な深遠な点を懇切丁寧に、しかも言葉にあらず、霊と真とを以て示し」た（『科学と宗教』21: 61）。そして、最後に運動の今後1年間の具体的な方針を示し、「東京大聖戦」への協力を希望して終えた。この「東京大聖戦」というのが、大平が高松から駆けつけた青山での講演会である。

参加者たちは「全東洋を基督への大目的を以て、全身全霊を主に捧げ、十字架の下に死なんと」（『科学と宗教』21: 61）順次祈り、誓言を記して署名した。最後の晩には感謝会が開かれて神への感謝が捧げられ、「又会ふ日迄」の歌を合唱して別れを惜しんだ。参加者たちの目には、「焼かれ、鍊へられた

霊を以て今山を降らんとする勇士」たちが行く先に迫害と縄目が待つのを覚悟で各地へ散ってゆく「悲壮な光景」に映っていた（『科学と宗教』21: 61）。彼らは「ハレルヤ」「しっかり頼むよ」「やって下さい」「祈っていますよ」などと声を掛け合い、一人去り、二人去りと、次第に下山して行った。ただし、豪雨のため翌日まで残った者も少なくなかった（『科学と宗教』21: 62）。

この修養会に参加し、佐藤に感化された若者たちの気持ちを、参加者の体験記は以下のように記している。

先生の一言一句心にしみ、肝に銘ずる。我等の血は踊る。そして我等今この国難に当り、殉ぜんとの固い決意が生れ出て来る。我等は今何がなんでも立たねばならぬのだ。右に千人、左に万人倒れ、例へ幾万の勁敵せまるとも我行かんと決意は、心の奥底から湧き上つてくる。闇に迷える難船が遥かかなたに煌々と光る灯台を発見したるにも似て、我等の行く途は明確に教へられ愈々進路は定まつたのである。我等は一路破邪顕正直進あるのみである。神、儒、仏教よりキリストへの道を、真理の信仰の光に照しつゝ、歩一歩と辿ると共に、霊的に滅びつゝある祖国を、全東洋を基督へ返さんが為め戦ひ抜いて行く。是が我々の進むべき唯一の道であり、それ以外に如何なる道もないとの強い確信と自覚とを与へられた。神は愛する先生を通じて我等を導き、新日本建設のため全東洋の救のために用ひんとして居られるのだ。何たる感謝であらう。何たる恵であらう。（『科学と宗教』23: 49-50）

大平正芳はこうした若者たちの中にいた。

4. 佐藤定吉の高松再訪

7月の末に修養会を終えた後、佐藤は9月のおわりからまた伝道の旅に出た。再び高松を訪れたのは11月である。6月の際、佐藤は高松に1日しかいな

かったが、11月は20日から24日まで滞在している。佐藤は11月20日の午後2時20分に高松に到着すると、さっそくその日の夜7時から讃岐会館において「祖国日本の特殊使命」と題する市民向けの講演を行っている。500人ほどの聴衆に向かって「現代社会救済の道は生命の宗教を確立する一事にあり」と説き、「人生の根本道は宗教問題に存する所以を力説」して「活宗教を求むべきヒントを与え」たという(『科学と宗教』25: 55)。

翌11月21日はまず、午前10時より県立師範学校で教育の真義、人間生活の本義を説き、「新時代」における教育者の使命は靈的に蘇生した人間をつくることにあると力説して「若き魂に力強く神の靈を注入」(『科学と宗教』25: 55)した後、午後は高松市内の教育関係者を中心とする集会において従来の知識偏重の教育を批判し、「教育の使命は人間建築としての靈的教育にある」(『科学と宗教』25: 55)と訴えて反省と自覚を促した。夜は7時から昨日同様、讃岐会館で一般市民に向けて、「見神の道」と題する話をしたという(『科学と宗教』25: 55)。

『科学と宗教』誌に具体的な話の内容は記録されていないが、『暁鐘』第9輯に「見神の道」と題する文章がある。それによると、佐藤が福岡に住んでいた頃のある夏の夜、蒸し暑さで眠れず浜辺を散歩していると、闇夜の海上に何か光が見えたような気がした。佐藤は強度の近眼だったためよく見えなかったが、浴衣の袂にメガネがあるのに気づいて掛けてみると、沖の漁火であった。このなんでもないような出来事が、佐藤にとっては突如眼の前が開け、迷いも疑いも拭い去る体験となる。すなわち、それまで佐藤は神を見る明らかな体験を持っていなかったが、この出来事から、神を見ようとするならイエスを通じて見ればよいのだと気づいたという。それまでの自分はイエスを抜きにしてただ神だけを見ようと焦っていたのであり、あたかもメガネを掛けずに近視の目で沖の漁火を見ているようなものだったと、佐藤は語る(『暁鐘』9: 41-47)。

なお、この日の夜の市民講演会に先立ち、高松で

の記念すべき第1回の「野戦」が行われたという。この記録に大平の名前は挙がっていないが、先に紹介したように、この2日後に「熱情溢る、開会の挨拶」をするくらいであるから、この「野戦」にも参加したのではないだろうか。

明けて11月22日、佐藤は高松から丸亀、坂出に足を伸ばしている。午前中、高松高等女学校で「懇ろなる信仰の導きを与へて若き魂の中に靈的芽生を培」(『科学と宗教』25: 56)うと、丸亀へ移動して午後2時から丸亀高等女学校で「若き女生徒の靈に食ひ入るが如き鋭さと然も太陽の如き温さを以て諄々と信仰生活の大切なる所以を説き聞かせ」(『科学と宗教』25: 56)、さらに「イエスの僕会」の会員たちと大挙して坂出へ移り、午後6時から300名ほどの聴衆に「偉大な感激と神ながらの道に対する明晰なる理解を与え、実に想像以上の大勝利であった」(『科学と宗教』25: 56)という。坂出から高松へ戻る列車に乗った時には午後10時半になっていた。

11月23日、佐藤はまず木田農学校の学生に対して、種まきや発芽、開花、結実といった農業に関連した比喩を用いて神の道を説いた後、同行の人々と一緒に屋島に登山している。大平も一緒に登ったのかもしれない。そして、高松に戻り、午後3時半から高松高商で、先に挙げた大平による「熱情溢る、開会の挨拶」が行われることとなる。大平が開会の挨拶をしたこの講演の演題は記録されていないが、200名ほどの聴衆はいずれも真摯な青年ばかりで、きわめて真面目な落ち着いたある集会であったといい、その中には「やがて真に靈眼開かれて」夜の座談会に出席するに至った者もかなり多かったという(『科学と宗教』25: 57)。

その夜の座談会は、同日午後7時から讃岐会館別館で開かれている。佐藤を中心として50名ほどが集まり、聖書の「エペソ人への手紙」についての講義と、「イエスの僕会」の「我らの主張」および「宣言」についての説明があった(『科学と宗教』25: 57)。そしてその後、「決心の戦士」を募って「高松イエスの僕会」が結成された。

聖霊我等の上に裕に降り給ひ、会衆は先生の説かるゝ真心よりの神の福音を聴きて十二時頃迄時の移るを知らず。今や力強く誕生し来つた高松僕会は、愈々結束し自重しつゝ、新日本建設の一大礎石として彼地に置かれたのであつた。(『科学と宗教』25: 57)

翌24日、佐藤は高松を離れ、大阪に立ち寄つた後、東京へ戻っている。

5. 東京大聖戦

大平自身は「秋には青山の青年会館における全国大会にも出席するほど夢中に」なつたと回顧しているが、東京の青山で規模の大きな講演会が開かれたのは、秋というよりはすでに冬の12月2日から4日にかけてである(『科学と宗教』25: 61-2)。すなわち、大平は11月24日までの佐藤の高松滞在の後、あまり日をおかずに東京まで駆けつけたことになる。青山での講演の参加者の回顧録によると、「全国から僕会の猛者連が集まり、この学生弁士の中には四国の高松高商から駈けつけた後の外相大平正芳兄の紋付き羽織はかまといういでたちもあって、熱弁がふるわれた」(石黒 1970: 396) という。

講演会の初日、12月2日の午後5時ごろ、今にもくずれそうな空模様のもと「イエスの僕会」の会員たちが青山会館の前に集合する。しかし、停電のせいで本来なら終わっているはずの映画上映会が止まったままになっており、中では大勢の人が帰るべきか待つべきか迷っていた。なんとか電気が戻って映画会は6時までには終わり、ようやく講演会の参加者が会場入りし始める。その大半は青年学生であり、女性も多く、老人もいる。6時半の開会前に聴衆の数は千を超える。開会の宣言に続いて賛美歌が歌われ、聖書の朗読と祈禱、「イエスの僕会」についての説明、次いで会員による演説が続き、佐藤が壇上に立った時にはすでに7時50分になっていた。

日本には力がある。問題はこれを如何に用ふべきかである。今日本は行詰まつたが既に新しい日本がある。私にとつて聖上のお若い事がどんなに有難い事か。この新生の若い日本に私は力の用ひ方を考へたい。今日はその序論である。明日は日本の生命たる皇室中心主義と基督教を明後日は愈々日本の特殊使命の結論を共に考へて見たいと思ふ。(『科学と宗教』26: 51)

青年天皇として登場した昭和天皇がどのように受け止められていたかの一端が垣間見えるが、この後3日間にわたる青山会館での講演会は、記録を見る限り「皇室中心主義」の傾向が強い。

この日の佐藤は「科学と宗教」から説き起こした話を「昭和の精神維新」へつなげてゆく。まず、科学は「物質界の公道」であつて宇宙の真理と力とを明らかにし、宗教は「精神界の公道」として精神界の真理と力とを明らかにするとの「科学と宗教」理解から(『科学と宗教』26: 51)、物質進化、ダーウィニズムの生物進化、人間から始まるとされる「靈的進化」(『科学と宗教』26: 52)について説く。生物の進化は人間までが動物であつて、人間から先は靈であり、人間は生物進化の終着点にして靈的進化の出発点なのだという(『科学と宗教』26: 53)。そうした人間にとっては靈的進化の一本道をまっしぐらに進むしかないのであつて、これまでの自己中心の生活を改め、神中心の生活としなくてはならない。目標は絶頂としての神であつて、これに向かつて一歩でも進んだ生活が勝利なのだとして佐藤は訴える。そして、「明治維新に一切を天皇に御返し申上げた如く昭和の精神維新は一切を神への返還運動」(『科学と宗教』26: 54)なのだとする。

佐藤によると、人間の魂は神からの預かり物なのであり、いつかは元の持ち主に返さなくてはならない。預かり物を返すには、預かつた時のまま良くも悪くもせず返すか、悪くして返すか、より良く立派にして返すかの3通りがある。元の持ち主が喜ぶのは当然、立派にして返してくれることであり、神

が人間に望んでいるのも人間が立派に靈的完成を遂げることである(『暁鐘』5:34-5)。この靈的完成を目指すのが靈的進化ということになる。

佐藤は、自分たちの信仰は間違いなく祖国は救われるとの確信の上に立つものでなければならぬと結んで講演を終える(『科学と宗教』26:54)。祈りと賛美歌が続いて散会すると、外は雨であった。

講演会2日目、12月3日も前日同様、賛美歌に始まり聖書の朗読、祈禱、会員による演説と続いた。会員の演説の中には、「我国体の宗教的意義」と題して、「皇室中心主義は日本の大脳である。これを失つて日本に生命はない」とし、「全体の生の為には一細胞は喜んで死ぬのである。全体の為に生き全体の為に死する、是等の人の手に依つてこそ日本の救は可能にされる」(『科学と宗教』26:56-7)という社会進化論的な発想も見られる。

この日の佐藤の講演の題も「皇室中心主義と基督教」であり、「皇室中心主義は日本のビタミンである。基督教はすべての人の靈のビタミンである。この両者は必然的にイコールでなければならない……日本は明治維新の精神にかへらなければならぬ!」(『科学と宗教』26:57)と叫べば大きな拍手が起き、会員たちは「戦友一同相抱いて優渥なる天恩に泣き、ハレルヤを唱へて歎び讚美」(『科学と宗教』26:57)して午後10時、帰途についた。

講演会3日目の最終日、12月4日も賛美歌、聖書の朗読、祈禱で始まり、この段階ですでに聴衆は千人を超え、佐藤が壇上に立った頃には1500人を数えるまでになっていた。佐藤は、宗教は体験であって、体験を抜きに説明しても分からないので、まずは入ってもらいたいと前置きしてから、自らの体験をもとに日本人の特性を論じる。佐藤の話は聴衆を笑わせつつも襟を正させるものであり、話が明治天皇から銀時計を与えられた時のことに及ぶと聴衆の中にはすすり泣きの声が起こった。佐藤は恩賜の銀時計を下賜された時、「佐藤、日本を頼む」との声なき声を聞いたという(三谷 1970: 445)。「私はその時、陛下の前に『お、陛下、やります!』と誓つたので

ある!……今かうしてこゝに立つのもその誓を果さんが為である!」(『科学と宗教』26:59-60)と佐藤が叫ぶと、聴衆は涙し拍手を送った。

続いて佐藤は、インドに始まった仏教は日本でのみ生命を保ち、儒教は中国では滅んで日本にあり、キリスト教もまた日本にあるものが最も良質であると説き、日本の神道には開祖がないが、このことは日本人に神を知る能力が備わっていることを示すものだとする。そして、赤穂義士が変装して江戸に下ったように、自分たちはキリストが変装したものとして地上に働くのだと結び、10時閉会。「一同の上気したほゝに片割月が寒く照る」夜であった(『科学と宗教』26:60)。

6. その後の大平正芳と佐藤定吉

大平は「イエスの僕会」に参加した翌年1929(昭和4)年12月27日に観音寺教会でキリスト教の洗礼を受けている。そして高松高商を卒業した後、「イエスの僕会」で知り合った桃谷勘三郎の経営する会社が佐藤の発明した薬品を製品化し、キリスト教伝道の資金にするというので手伝うために大阪へ出る。しかし、製品化は一向に進まず、一旦郷里へ戻った後、1933(昭和8)年、23歳で東京商科大学(現・一橋大学)へ進学する。大平は、内村鑑三やその門下の塚本虎二、黒崎幸吉、江原万里らの著作に親しみ、矢内原忠雄や賀川豊彦のもとを訪れるなど、「聖書を通してキリスト教に進んだ」(大平 [1978] 2010a: 19)。大平と桃谷との交際は後々まで続いたようだが(大平 [1978] 2010a: 22)、東京へ出てからの大平が目白にある佐藤の研究所を訪れたことがあるのかどうかは不明である。

佐藤のほうは、大平が洗礼を受けた1929(昭和4)年、アメリカにまで伝道の旅を広げ、「南加イエスの僕会」が結成される。アメリカへはその後、1935(昭和10)年と戦後の1955(昭和30)年にも渡っている(佐藤 1970: 556)。1932(昭和7)年には東京に「東洋使徒神学校」を設立し、国内にとどま

らず北京、天津、満州にも足を伸ばすなど、きわめて精力的に伝道を続け、自宅にいるのは1年のうち2、3ヶ月程度、家族で正月を迎えることも数えるほどしかなかったという（佐藤 1970: 558-9）。

佐藤の講演に感化され、浅間山麓での修養会や青山での講演会に参加した1928（昭和3）年から10年を経た1938（昭和13）年、大蔵省に入省して仙台税務監督局間税部長となっていた大平は、ともに「イエスの僕会」で活動した友人を追悼して次のように回顧している。

昭和三年から五、六年頃にかけて母校に在学せし諸君は「イエスの僕会」なる団体の果敢な活動を記憶されていることと思う。それは当時全国の大学高専を遊説されて多数の共鳴者を獲得した工学博士佐藤定吉氏の自然科学的宗教観に魅せられた一群の学生の結社で、既成のYMCAの萎靡沈滞に対する反動も手伝って或は校庭に或は街頭にこの群独特の活潑な動きを展開していた。成程初期に於ては運動の焦点の見定めがつかず綱領自体に清算さるべきものもあったので何かしら地につかない突飛な相貌を呈していたかも知れない。或は当時の学生層に喰入っていた一般的不安をこう言った側面から発散させようとする一つのがきとして一般に受取られていたかも知れない。しかしともかくこの群は一つの異様なセンセーションを校の内外に捲き起し相当優秀な学生の多くを自己の陣営に迎えていた。そして彼等は抑え難い内面的闘争と清算の過程を辿って或者は基督教の正統に導かれ或者はこれを捨てて行った。（大平 [1938]2010: 338）

「或者は基督教の正統に導かれ或者はこれを捨てて行った」と述べているように、大平自身これ以前すでに「イエスの僕会」から離れていた。そうした大平の目に「清算さるべきものもあった」と見える綱領、すなわち「イエスの僕会」の信条とは以下のようなものである。

- 一、我等は活ける實在の神を信ず。
- 二、神の靈は可視的肉体としてのキリスト、イエスに顕現せる事を確信し且つ活ける主イエスの臨在を信ず。
- 三、我等は分派的教義、宗旨を超越し、イエスの靈的体験を中心とする実生活を以て宗教の根本義となす。
- 四、我等は生命界の真理を広く宗教に求め、神道、儒教、仏教を旧約とする活けるイエスの新約運動を以て目的とし、従来の直訳的伝統を脱して東洋的基督教を樹立せんとす。
- 五、我等は基督教の日本化運動を以て我国体の発揚に勉め、真の愛國的皇室中心主義は、神中心の生活に在りと断ず。
- 六、我等は宗教の真理を以て、社会運動の創造的源泉なりと確信し、宗教の日常化及び職業の宗教化を期す。
- 七、我等は社会改造の根本義は人間建築としての教育にある事を信じ、全人的教育は宗教との帰一的境地に於いてのみ達成せらるべき事を主張す。
- 八、我等は凡ゆる文化科学を神に於いて統一せん事を期す。
- 九、我等は東洋意識に立脚せる精神維新の完成を期し、主に在りて結束せる同志の一同を以て、民族的理想実現の礎石たらしめ、靈的王国建立の爲め、真実一路、破邪直進せん事を確言す。
- 一〇、我等は、国家的福祉と東洋民族救済の爲め、「全東洋を基督へ」の標識の下に神と人との前に完き献身を誓約するものとす。（『科学と宗教』18: 6-7）³⁾

このうちのどれを1938（昭和13）年の時点での大平が清算されるべきと考えていたのかは不明だが、第四における神道などとキリスト教との独特な接合や、第五の「愛國的皇室中心主義」に見られるように、こうした佐藤の「キリスト教」は、当初から「日本の伝統的な精神・思想・宗教とキリスト教との接合をはかる思想の総称」（原 2005: 50）という

意味での「日本的キリスト教」であった。

佐藤は、先に挙げた大平の回顧の前年、1937(昭和12)年の年末に『皇国の世界指導原理』と題する共著を出版して「神が、皇国を世界歴史第二の発足点として選んでみ給ふ事は歴然たる事実」(佐藤・原 1937: 12-13)であるとしており、「愛国的皇室中心主義」への傾斜をさらに強めていた。昭和10年(1935年)以降の佐藤は『信仰殉国』『国体と宗教』『皇国日本の信仰』『皇国信仰読本』『皇国信仰概説』『皇国神学の基礎原理』『皇国信仰鉄壁の布陣』などのタイトルの著作を矢継ぎ早に出版し(佐藤定吉著書目録: 277-278)、1941(昭和16)年には「イエスの僕会」を「皇国基督会」と改名するに至る。これは息子である佐藤信の目にも、「確かに戦時中、父は時流に乗って日本精神を強調し、栄光の日本を夢見ていた」ように映ったが、「父の本意は何とかがしてキリスト教を日本に土着させたいと願っていた」ようでもあり、「日本精神の完成こそキリスト教の十字架であると信じていた」という(佐藤 1970: 560)。

このような佐藤は、下記のような人々の一人として位置づけられざるを得ないであろう。

「福音」「十字架」という言葉や概念が頻繁に用いられてキリスト教の立場を説明し強調し、キリスト教の意義を弁証したとしても、その本質において実はこれらを掴みきれてはおらず、日本の危機的状況の中での素朴な愛国心の根柢を、日本の中心としての天皇制イデオロギーの一点に集中し、この両者をいかにかけて連続させて繋げようとした人々がいた。(原 2005: 66)

息子の佐藤信も、「その神学的背景には行き過ぎがあって今日多くの方面より批判の声も高い」(佐藤 1970: 560)と述べている。そもそも佐藤定吉についてのまとまった論考は、岩瀬誠が佐藤の神道理解を分析したもの(岩瀬 1992)のほかは見当たらず、研究対象として認知すらされていないともいえ

る。

だが、「日本的キリスト教」についての論考の中で佐藤についても少し触れている笠原芳光が指摘するように、ローマ帝国でのキリスト教と政治権力との結合や、中世カトリック教会の保持した政治権力といった西欧史を想起するだけでも、「日本的キリスト教」に対してのみ国家との密着を批判するのは大きな手落ちである(笠原 1974: 138)。先に引用した原誠も、「日本的キリスト教」は、単に右翼・国粹主義的、軍国主義的という点だけで一蹴すべきものではないとする(原 2005: 50)。

大平がすでに戦前の時点で佐藤の運動から離れていることから、大平にとって佐藤の教説の物足りなさは「愛国的皇室中心主義」にあったわけではないと思われる。大平自身の説明では、「佐藤先生の諸説は、われわれに神に対する畏れの念を植えつけるには役立ったが、その神がなぜ『愛』であるかについては、どうしても納得がゆくものではなかった」(大平 [1978]2010a: 19)。これは「イエスの僕会」に加入した1928(昭和3)年から50年が経った1978(昭和53)年の時点での回顧だが、大平は佐藤について、「先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水的な役割を果たしたもの」としている(大平 [1978]2010a: 19)。

とはいえ、たとえ「呼び水」でしかなかったとしても、先に見たように「一つの異様なセンセーションを校の内外に捲き起し相当優秀な学生の多くを自己の陣営に迎えていた」と大平が回顧するほどの魅力はあったわけであり、佐藤の講演は「どこの集会場も超満員で、開館以来の盛況であるということが多かった」(西本 1970: 487)。

検討されるべきなのは、国家との接近とは別に、佐藤の教説の魅力がどこにあったのか、なぜそれが魅力を持ったのかという問題である。少なくとも、それを「カリスマ性」の一語で済ませることは安易であろう。この問題は本論の検討範囲を超えるが、おそらくその魅力の一つは「科学」という点にあったのではないだろうか。だからこそ、大平も佐藤の

講演を「科学と宗教」として記憶し、佐藤の説いた「キリスト教」のことを「先生の科学と宗教についての論説」と述懐したのであろう。

戦後も引き続き神道の研究と「皇国神学の基礎原理」の研究に没頭していた佐藤（佐藤 1970: 559）は、最晩年においても、第二次世界大戦は東西文化を結ぶ媒体であり、「東洋の花嫁と西洋の花婿とは、遂に結婚する時が来た」、その結婚の地こそが日本であり、「まことに、日本はこの一事を全うする為に供えられた神の特選の国であった」という独特の解釈を展開している（佐藤 1958: 55）。もはや「愛国的皇室中心主義」が押し出されることはないものの、敗戦を経ても、その「日本」への信念が変わることはなかった。そして同時に、「死後霊の科学的検討」と「聖霊の科学的実験」の必要性を訴えるなど、これも独特の解釈ではあるが、「科学」へのこだわりも捨ててはいなかった（佐藤 1958: 90）。

佐藤が癌のため73歳でこの世を去ったのは、1960（昭和35）年12月23日のことである。

注

- 1) 以下、産業宗教協会発行の『科学と宗教』誌からの引用については、（『科学と宗教』 輯数：ページ数）のかたちで表記する。
- 2) 以下、産業宗教協会発行の『暁鐘』誌からの引用については、（『暁鐘』 輯数：ページ数）のかたちで表記する。
- 3) 八のみ『暁鐘』第2輯9頁を参照した。

文献

- 原誠, 2005, 『国家を超えられなかった教会』日本キリスト教団出版局。
- 服部治, 1970, 「感謝と告白」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 533-5。
- 猪口金次郎, 1970, 「東北大学時代の佐藤定吉先生」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 334-341。
- 石黒美種, 1970, 「僕会時代を回顧して」佐藤先生を偲

- ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 394-8。
- 岩瀬誠, 1992, 「日本的キリスト教指導者佐藤定吉の神道理解」『国学院雑誌』93(1), p14-30。
- 笠原芳光, 1974, 「『日本のキリスト教』批判」『キリスト教社会問題研究』22, 114-139。
- 目加田光, 1970, 「神様と石ころとの三カ月間」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 454-7。
- 三谷久男, 1970, 「イエスの僕会と私」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 439-47。
- 水野誠, 1970, 「佐藤先生を通して新生した私」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 451-4。
- 西本信, 1970, 「佐藤定吉先生を偲ぶ」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 484-8。
- 大平正芳, [1938] 2010, 「眞鍋正直兄を追慕して」福永文夫監修『大平正芳全著作集1』, 338-40。
- , [1978]2010a, 「私の履歴書」福永文夫監修『大平正芳全著作集1』, 10-96。
- , [1978]2010b, 「大平さんにズバリ・インタビュー」福永文夫監修『大平正芳全著作集6』, 567-73。
- 大平正芳回想録刊行会, 1983, 『大平正芳回想録』鹿島出版社。
- 佐藤信, 1970, 「父の生涯を想う」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 545-64。
- 佐藤定吉, 1924, 『自然科学と宗教』厚生閣。
- , 1925, 『死に直面せる体験』厚生閣。
- , 1958, 『人はなぜ死ぬのか—死の科学と哲学と神学』霊響山道場。
- 佐藤定吉・原正男, 1937, 『皇国の世界指導原理』信仰殉国会。
- 山室民子, 1970, 「回想」佐藤先生を偲ぶ会『佐藤定吉追想録』新教出版社, 365-370。
- 『暁鐘』産業宗教協会, 2, 5, 9輯（1928年）。
- 『科学と宗教』産業宗教協会, 14, 18, 20, 21, 23輯（1928年）, 25, 26輯（1929年）。
- 「佐藤定吉年譜」佐藤先生を偲ぶ会, 1970, 『佐藤定吉追想録』新教出版社, 1-10。
- 「佐藤定吉著書目録」佐藤先生を偲ぶ会, 1970, 『佐藤定吉追想録』新教出版社, 275-81。

Young OHIRA Masayoshi and the Christianity of SATO Teikichi

SUMIKA Masayoshiⁱ

Abstract : It is well known that former Japanese Prime Minister Ohira Masayoshi (1910–1980) was a Christian. In 1928, he enrolled in Takamatsu Commercial High School and was then inspired by a lecture delivered by an independent evangelist, Sato Teikichi (1887–1960). Ohira immediately joined Sato's evangelical organization, the Society of Servants of Jesus (Japanese: Iesu no Shimobekai). Sato Teikichi had been a chemistry professor at Tohoku Imperial University. He was born as a son of a Buddhist monk, but was baptized by Congregational pastor EBINA Danjo. Sato gave lectures to the believers of the Salvation Army Japan at first and later established the Society of Servants of Jesus. Sato developed a unique theory of science and religion, and at the same time was a fervent advocate of the Japanese Imperial Household. Sato tried to link Japanese traditional spirit, religion, and loyalty to the Emperor with Christianity. His theory is therefore regarded as part of Japanese Christianity, the nationalistic Christian belief during World War II. Young Ohira was absorbed in the activities of Sato's organization; he trained for seven days at the foot of Mt. Asama and attended a three-day lecture held in Tokyo. These facts are told by Ohira himself and recorded in his biography. However, the details of Ohira's religious activity and the contents of Sato's lectures are not explained in these sources. Therefore, in this paper, I will give details of Sato's lectures and Ohira's religious activities by referring to the magazines published by an association established by Sato.

Keywords : OHIRA Masayoshi, SATO Teikichi, Society of Servants of Jesus, Japanese Christianity.

ⁱ Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University